

平成30年度高等教育のあり方検討会 委員意見のまとめ

(委員五十音順)

キーワード	意見概要
リカレント教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○それぞれのライフステージにおいて分業を行うのではなく、色々なことを同時にやることができるという、そのような一生を通じた時間の使い方が重要である。(伊藤委員)</li> <li>○高齢者を支える人材(医療・福祉)が必要。また、多面的な学びの場が必要。(川北委員)</li> <li>○リカレント教育は、それを単独でやるのではなくて、若者の雇用創出に繋げることで、若者とリカレント教育を受ける社会人とがリンクして、例えば地元で企業を興すというのは面白いのではないか。(木村委員)</li> <li>○人生100年時代では、79歳まで現役でないと、社会体制のバランスがとれない、と言われている。リカレント教育の重要性は増している。(坂本委員)</li> <li>○中央教育審議会大学分科会将来構想部会においては、高等教育の将来像を考える論点の一つとしてリカレント教育を挙げている。また、キーワードとして「多様性」を掲げている。多様な教育研究分野、多様な教員、多様な学生、多様性を受け止めるガバナンスが、これからの高等教育機関には求められている。(清水委員)</li> <li>○人生100年時代構想会議では、大学に対し地域や産業界との連携を強化し多様なリカレント教育プログラムを開発・実施することを求めるとともに、企業の経営者の意識改革も必要と言われている。(清水委員)</li> <li>○職業人生が長期化する中、断片化しがちなキャリアを統合する意味で、リカレントな高等教育は恰好の場であると考え。(塚崎委員)</li> <li>○技術革新、知識社会化が進む中で、求められる職業能力は日々、変化し、かつ高度化・専門化も進んでいる。地元の産業界等とも連携し、実践的な教育プログラムを提供すれば、実践的な職業能力を向上できるし、社会全体としても、労働生産性を高めることができる。(塚崎委員)</li> <li>○デジタル化、AI化、ロボット化が進むこれだからからこそ、真に大切になっていく基礎力(考え抜く力、課題発見・解決力、コミュニケーション力等)を鍛錬する場となるリカレント高等教育が必要と考える。(塚崎委員)</li> <li>○リカレント教育という身近な交流の場が、地域のソーシャル・キャピタルを豊かにしていくことに繋がると考える。(塚崎委員)</li> <li>○これからの学びの場に求められるものは、囲い込みではなく、自由な出入り、共創の場である。出入り自由、ゆるやかな繋がりが良い。(戸野谷委員)</li> <li>○高齢者のリカレントも大切。一方、実践的な学びの分野や領域が必要。家業を承継する際の不安の一つは、スキルがないこと。会計・簿記を知らない。中小企業論、経営論などを教えてもらいたい。(中西委員)</li> <li>○教育の機会均等の確保も必要。学びたいときに、学べる環境づくりが必要。(松下委員)</li> </ul>

	<p>○今後の新たな高等教育を考えるうえで、カギとなるのは「学び直し」と「実践的な教育環境」にある。(松本委員)</p> <p>○高校卒業生だけを対象としているわけではなく、会社の社員、企業経営者、起業・開業を目指す者など、年齢、キャリアを問わず入学できる点において、従来の枠組みにとられない大学である。(松本委員)</p>
アクティブ・ラーニング	<p>○菊川ジュニアビレッジというものをやっているが、子どもたちに本気で農業を経営させている。大人が本気でなければ、子どもも本気にならない。教育の目的とは、一人ひとりの生きる力を高めること。オブラートに包んでも仕方ない。現実を見せることが大切。(加藤委員)</p> <p>○色々な知識・知恵を活かして取組み、更に実践すべきだと考える。そういう高校であったり、高等教育機関でありたい。また、行政や民間企業との連携というのが重要になってくると思っている。(高木委員)</p> <p>○学びの選択肢の拡大も良いが、若い世代には実学だけではなく、哲学も必要。大人世代は社会の変化に気づき、未来を予測し、実践に結びつく学びも重要。(松下委員)</p> <p>○アイセル女性カレッジは、開始当時は、女性の高等教育の機会が少なかったため、こうした人たちへの専門的な学びの場の提供として始まった。今では働く女性も増え、管理職になることも視野に入れた女性への講座となっている。(松下委員)</p> <p>○地域課題の解決のための事業を進めてきたが、結果的にはアクティブ・ラーニングを実践していた。(松下委員)</p>
地元の強みを活かした学び	<p>○静岡市が持つ行政資産、観光資源、地域産業が持つノウハウを学ぶ場が必要。(浅利委員)</p> <p>○清水港を活かした海洋関係の大学が必要。(木村委員)</p> <p>○商工会議所の立場として、中小企業支援の観点から、起業の「副学」スクールみたいなものが良いと思う。必ずしもハードがなくてもできる。(戸野谷委員)</p> <p>○例えば、アンテナショップのようなもの、静岡を知ることができる「アンテナカレッジ」があると良い。(戸野谷委員)</p> <p>○コンテンツの資源はたくさんあるが、これに対する専門教育機関がない。(中西委員)</p> <p>○義務教育段階からの地元を学んでもらうことが大切。郷土愛、シビックプライドを醸成することが大切。仮に県外に行っても、静岡人としてプライドを持って話せることが必要。そのことが、Uターン就職に繋がる。(中西委員)</p> <p>○若い世代に地域に愛着を持ってもらうことが必要。そのことが、Uターン就職にも繋がる。(松下委員)</p> <p>○静岡県では、産業人材の育成に資する大学をつくる計画があるが、経営のプロを育成する拠点は無い。敢えて、中堅・中小企業のマネジメント教育やリーダー論を教えることで、全国に通用する、全国から静岡に学びに来る大学を目指したい。(松本委員)</p>
専門職大学	<p>○リカレント教育・社会人受入の観点、また起業家育成の観点から、専門職大学院は選択肢の一つ。(坂本委員)</p>

	<p>○専門職大学こそ、今後の新たな高等教育だと考えている。(松本委員)</p> <p>○その理由は企業の要望を反映した教育を実践できること。実務家教員を積極的に任用すること。社会人、卒業生、専門校生など多様な学生を受け入れることの3つ。(松本委員)</p> <p>○特に3つ目の理由は、高校卒業生だけを対象としているわけではなく、会社の社員、企業経営者、起業・開業を目指す者など、年齢、キャリアを問わず入学できる点において、従来の枠組みにとられない大学である。(松本委員)</p> <p>○静岡県では、産業人材の育成に資する大学をつくる計画があるが、経営のプロを育成する拠点はない。敢えて、中堅・中小企業のマネジメント教育やリーダー論を教えることで、全国に通用する、全国から静岡に学びに来る大学を目指したい。(松本委員)</p>
連携強化	<p>○大学設置ありきで考えるべきではない。様々な可能性を議論すべき。(浅利委員)</p> <p>○市長のリーダーシップの下、大学・産業界・行政が連携していくことが必要。(浅利委員)</p> <p>○競争力をさらに強化するような拠点な構築も必要。(浅利委員)</p> <p>○より地域に近い高等教育機関というものが求められている。(伊藤委員)</p> <p>○大学、高等教育機関は独立した存在ではなく、地域の企業、自治体、地域の活動団体とどのように連携していくかが重要。(伊藤委員)</p> <p>○市が費用を一部負担して、既存大学に学部・学科を作ってもらう「寄附学部」、「寄附学科」という考え方もある。(坂本委員)</p> <p>○今後の大学は、大学内だけではなく、地方自治体・産業界・NPOなどとの連携が必要。(清水委員)</p> <p>○市内・県内の各大学との連携を一層強化していくことも考えるべき。(清水委員)</p> <p>○企業の要望を反映した教育を実践できること。実務家教員を積極的に任用することなど、大学設立には産業界の強い連携が必須。(松本委員)</p>
18歳人口流出への対応	<p>○仮に地元進学率を全国平均並みの78%にすると、県内に進学できる学生が5,400人増える。1人当たりの学費を100万円とすると、合計54億円になる。つまり、54億円が県外に流出していることになる。(川北委員)</p> <p>○県内に選択肢がなく、やむを得ず県外に出ていってしまうのであれば、その選択肢を地元で作ることを考えなければならない。大学を作るか、作らないかの議論ではなく、どういう選択肢を提供していくのかという議論である。(川北委員)</p> <p>○大学の量の問題もあるが、地元進学率の低さが問題。(坂本委員)</p> <p>○大学の数が圧倒的に足りない。人口10万人当たりの数は、全国40位代である。県の規模を考えれば、危機的であるといえる。(中西委員)</p> <p>○地元に残りたいが、地元に入りきれない子たちが、やむを得ず外に出ていってしまった、ということは否定できない。(山内委員)</p> <p>○大学設置の是非は別として、流出する18歳人口をどうするか、という問題は結論を出したい。(山内委員)</p>

<p>地元就職</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○静岡県は地元就職意識の高い地域である。これを、実態としての地元就職、特にUターン就職に結びつけていくが重要である。(木村委員)</li> <li>○企業の受け皿が足りないことが問題。また、そもそも起業の数が少ない。(坂本委員)</li> <li>○学生を地元へ縛り付けようとする発想は厳しい。(戸野谷委員)</li> <li>○静岡の特徴は、地元就職意識の高さ、市民は学びの意識が高い、世帯年収は高め、である。(戸野谷委員)</li> <li>○地元就職を促進するためには、やはり大学の数が必要。地元の大学へ行けば、多くは地元で就職する。(中西委員)</li> <li>○Uターン就職率が低い、静岡には働く場はたくさんある。このことを、県外にいる県出身者に知らせることが必要。(中西委員)</li> <li>○成功例といわれる公立大学であっても、就職先は多くが東京であるという問題がある。(山内委員)</li> </ul>
<p>高大接続</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○義務教育終了後の長きに渡って、生涯に渡って考える必要がある。社会人になったから終わりではなく、ずっと学び続ける環境が必要ではないか。(高木委員)</li> <li>○世界的な視野を持つとともに、地域を愛する人材、「グローバル人材」の育成に取り組んでいる。これを土台に据えて、高等教育のあり方を考えていただきたい。(高木委員)</li> </ul>
<p>高等教育の姿・分野</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○高等教育機関には、人材育成だけではなく、研究面においても高い公益性が求められている。(浅利委員)</li> <li>○高等教育機関には、内的動機を誘発する機能と研究サポート機能が必要。ハードは手段の一つであって、必ずしも必要でない。(加藤委員)</li> <li>○高等教育機関を作ることは手段であり、目的ではない。(坂本委員)</li> <li>○あるべき姿を考え、それに近づける方策を検討すべき。高等教育の充実は、その手段の効果的な一つ。(坂本委員)</li> <li>○18歳人口の急減期を迎える今、大学を新たに作るのは大変である。まず、育成する人材像を固め、入口ニーズ(高校生)、出口ニーズ(産業界)のエビデンスを示す必要がある。それに、教員の確保も難しい。人気のある(社会的ニーズの高い)分野ほど、優れた教員・研究者は不足している。(清水委員)</li> <li>○リカレント高等教育の場を移住者や外国人にとって開けた場にする。ことで、移住者や外国人が移住に伴う不安を和らげたり、静岡で新しい職業キャリアを始める際に知識・情報を習得できたり、地域コミュニティに馴染むきっかけを得たりすることができる。(塚崎委員)</li> <li>○まちに大学があるのではなく、まちの中に大学を感じられることが必要。(戸野谷委員)</li> <li>○ベンチャー精神のある若者を世界中から集め、静岡で起業してもらう。静岡に来た以上、静岡で会社を作ってもらったり、静岡の企業を大きくしていただく。例えば、世界中の優秀な人を集めて、授業は当然、英語でやる。教員も半分、外国から採り、独立採算で収益を上げてもらい、黒字化を目指していただく。(山内委員)</li> <li>○今後の新たな高等教育を考えるうえで、カギとなるのは「学び直し」と「実践的な教育環境」にある。(松本委員)</li> </ul>